
バカと武器と戦争

赤瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと武器と戦争

【Nコード】

N8629S

【作者名】

赤瞳

【あらすじ】

木下姉妹？を幼なじみにもつ主人公に文月学園での2年目の生活が始まった！！

期待に胸を躍らせ、入ったクラスは．．．．．バカばっかかよ！

だったら一戦争一で奪うのみ、今もう一つの物語が始まる．．．

主人公と原作キャラが織りなす話です。基本は原作+アニメ版です。優子がヒロインです。ネタたっぷりです。

バカップル好きな人はどうぞ。

オリ主人公紹介

こくぶつばさ
黒武翼

170cm弱の身長で髪は耳を隠す位の黒髪制服のブレザーを着ず、黒いロングコートを羽織っている

常に腰のホルスターにエアガンを携帯している

しかし、それはタダの威嚇のためであり、小型ナイフ、クナイ、手裏剣、麻酔銃、暴徒鎮圧用ゴム弾のライフルや、日本刀型のスタンガン（刃の所に当たると感電するようになっていて）を暗器しているが、武器に殺傷能力はなく、気絶か威嚇を目的としている

大量の武器を完璧に使いこなすため武装神アーマーマスターと言われている

木下優子と秀吉と幼なじみであり、優子の事が好きで両思いだが、優子に自分はふさわしく無いとお 思っていたが、Aクラス戦で優子の本心を聞き付き合っている

武器マニアであると同時にガンダムなどのアニメも好きである、理数系分野では教師にも匹敵するが、文系はFクラスなみ、『この世界は戦場』がモットーだが、不良などの悪党には容赦がなく、優しい一面もあるまた、戦術論の勉強もしているため策士でもある

武器を持っている理由は昔、優子を守ると誓ったが自分の力だけでは守れない事を思い知らされる事件があり、それいらい携帯している

召喚獣は黒いズボンに黒い服本人と同じロングコートを着ている

武器は暗器であり、点数に応じて日本刀を出す事ができるが、点数がすくないと一本しか出す事ができない

また、5点消費で銃、10点でライフルか手榴弾20点でミサイルランチャーかスタングレネード30点で対戦車ライフルを出す事ができる

1点消費でクナイ、ナイフ、手裏剣を投げる事もできる

消費点数は急所をつかなかった時のダメージでもあるが、召喚獣の操作もうまいので余り関係はなくなっている

腕輪の能力は『黒翼』^{こくよくう} 召喚獣に翼を生やし空中を飛ぶ事ができる

また、羽を飛ばして攻撃する事もできる

更に点数を消費することで、『漆黑』を発動でき、大量に宙を舞う羽に当たった召喚獣の術者の視界を一定時間暗闇にする

理数系が得意な事もあり、試験召喚システムの内容も理解しており、学園長に頼まれ、学園祭で発表する腕輪を独自で開発している

オリ主人公紹介（後書き）

主人公紹介です、いまいちキャラが立っていない気がする。

プロローグ「運命の歯車が狂いだす」(前書き)

おかしな日本語かも、しれませんが、そこは寛大な心で見えていただけたら幸いです。

プロローグ「運命の歯車が狂いだす」

「ねえ、つーくん。」

「なに？」

「あのね、私ね、将来の夢きめたよ！」

「へー何になりたいの？」

「あのね、私つーくんのお嫁さんになりたい！！！」

「へ？うん！いいよ。大人になったら優ちゃんを僕のお嫁さんにする！それが僕の将来の夢だよ！！！」

「やったー！絶対にお嫁さんにしてね。約束だよ！」

「もちろん、絶対にお嫁さんにしてあげるよ！」

そう、それは幼い日の思い出だった。

そして、彼らが出会った事で運命の歯車が狂いだす……………。

プロローグ「運命の歯車が狂いだす」(後書き)

次は本編に入っていきます、お楽しみに。

第1戦「この世界は戦場」(前書き)

問 以下の問いに答えなさい。

「調理の為にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

問題点：ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

黒武翼の答え

問題点：マグネシウムという酸素との反応が激しいもので鍋を作った事。

合金の例：ジエラルミン

教師のコメント

さすが理数分野は完璧ですね。

第1戦「この世界は戦場」

満開の桜が咲くこの季節、俺が文月学園に入学して2回目の春が来た。

この文月学園は試験校であり、他の学校を超越したシステムがある。

それは『試験召喚システム』とゆわれ、科学とオカルトと偶然で完成したシステムである。

偶然って言い切るにもどうかと思うが……………

このシステムでは、テストの点数に応じた強さを持った『召喚獣』を呼び出し戦う事のできるシステムで、教師の立ち会いのもとに呼び出す事ができる……………

また、点数の上限がないテストが用意されている。

そのためどこまでも成績を伸ばす事ができる。

さらに、クラス間での戦争『試験召喚戦争』と呼ばれるものがある。

2年生から可能になる。

クラスはAからFまであり、設備も成績によって決まっている。

そして、下位のクラスが上位のクラスに勝ったときには設備の入れ

替え、逆の場合はランクを1つ落とされる。

「おもしろい．．．．．ようは戦い、勝てばいいだけの話だ．．．」

と俺はつぶやいた。

「おい、遅刻だぞ。」

とドスのきいた声の大男が立っていた。

「新学期早々遅刻してくるのはお前とあのバカだけだぞ．．．．．」

と、あきれた様子の男は西村先生、鬼の鉄人と言われる教師だ。

「おはようございます鉄人．．．．．。西村先生。」

「いま、鉄人といわなかったか？」

「きのせいですよ。」

「そうか、歯を食いしばれ！」

と拳を振り上げてくる。

「まっってくださいよ！」

と拳をよけながら懇願する。

「まあいい……ところで腰に差しているそれだが……没収しても、こりんのだろ？」

俺の腰のホルスターにさされているエアガンを見てつぶやく。

「当然です。こうしとけば、変なのはよってこないし、人を守る事もできますから。」

「そうか……だが、悪用はするなよ。」

「はい。俺の所属はFクラスでいいんですよね？」

「ああ、振り分け試験の事は聞いた……おまえらしいと思っただぞ」

「ええ、俺は後悔していませんし、この方がよかったと思います。なぜなら……この世界は戦場』が俺のモットーですから。『戦争』をできるところにいるべきです。」

笑って答える。

「そうか……なら行ってこい、お前の戦場へ……
な。」

「はい。」

そういつて俺は校舎へと歩き出した。

「はやく、戦争になあれ(笑)」

とつぶやき。

第1戦「この世界は戦場」(後書き)

こんな感じで更新していくつもりです。

タイトルは登場人物の台詞です。

ガンダムX形式と行ったところですか(笑)
では、続きをお楽しみに。

第2戦「類は友を呼ぶってやつか……」(前書き)

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

弘法も筆の誤り泣きっ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木』から落ちる、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

(2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

黒武翼の答え

(1) ヒイロの自爆ミス

(2) タクラマカン砂漠での合同軍事演習

教師のコメント

文系教科は相変わらずですね。

第2戦「類は友を呼ぶってやつか……………」

「おいおい、ここはなんなんだよ……………」

3階にあがるとまず目に入ったのはAクラスの教室だった。

「こりやすげえな。」

見ると悲しくなってくるから自分の教室に行くとした。

2年F組と書かれた折れかけのプレートの教室を見ると……………

「こりやひでえ……………」

思わず言葉が漏れた

「とにかく中に……………」

とドアを開けると……………

「遅いぞ翼」

「……………なんでいるんだよ、雄二」

「暇だから、教壇にあがってみた。一応クラス代表だからな。」

と野性味たっぷり、笑っている奴は坂本雄二。俺の親友の一人で

あり、去年からのクラスメイトだ。

「そうか．．．それは好都合だな」

「だろ？」

と会話していると

「翼、おはようじゃ」

と秀が声をかけてきた。こいつは木下秀吉、俺の幼なじみだ。

「おはよう。やっぱり優子はAクラスか？」

「うむ。残念だったのう」

「そんなことないさ、こちらの方が戦争しやすいからな」

「そうか、ところで．．．」

と秀と雑談していると、

「おはよう翼」

と明久が声をかけてきた、こいつは吉井明久、俺の親友だ。どうしようもないくらいにバカなんだが、やればできる奴だと思っただが．．．

「ああ、おはよう」

と言ったところで先生が来たので適当な席に着く。

「えーおはようございます。このクラスの担任の福原慎です。よろしくお願ひします。」

と冴えないサラリーマンみたいなスーツの人が立っていた。神の声
『アニメ版の見た目だ』

なんか聞こえた気がしたが気のせいだろう。

「全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

「座布団に綿がほとんど入ってません」

「卓袱台の脚が折れています」

「窓の割れた部分から吹いてくる風が寒いんですけど」

不備だらげやん。

しかも、不備を申し出たところであまり改善されんし。

我慢しろ、木工ボンドで直せ、ビニール袋をテープで貼れ……

「必要なものがあれば極力自分で調達して下さい」

これは酷い……

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

さて戦友を見定めるとするか

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀が、隣で明久がなんかつぶやいてるが無視しよう。あいつは男だぞ。

「……………土屋康太」

とつぶやいてるのは俺の親友の土屋康太だ。相変わらずだな、二つ名は有名なものにな……………

「ねえ、翼」

「何だ？明久？」

「男しかいないんだけど、女子っていないの？」

俺からすれば優子がいない時点でどうでもいいんだが、答えてやる。

「落ち着け、そのうち聞こえるさ」

「海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

「す、すごいよ翼！本当に女子の声が聞こえたよ！」

喜ぶのも、つかの間だとおもつが……………

「でも、英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……
吉井明久を殴ることです」

「誰だ！？恐ろしくピンポイントで危険な趣味を持つのは！」

だから、言つたらうに……………

なかなか愉快的な自己紹介をした人物の方を見ると、笑顔で手を振ってこちらを見ている。

「はろはろー」

「し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

明久の天敵（明久談）島田美波であった。

あいつもクラスメイトだったんだが

「類は友を呼ぶってやつか……」

「やっぱりそう思う?」

どうやら明久も同じ考えのようだ

「これだけ集まってちゃん、早く自己紹介しろよ」

「うん」

そうこうしていると明久の番になった。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『『ダアアーリイーン!!!』』

野太い野郎共の声の大合唱。

非常に不愉快だ。

ノリは嫌いじゃないが、軽い吐き気がするぞこのゴミン共め。

「……失礼。忘れて下さい」

全く、さすがは明久だ。

何かしらしてかしてくれろ。

その後もしばらく自己紹介が続き明久の目がトロンとしてきた頃、ガラリと教室のドアが開いた。

ドアの先には息を切らせて胸に手を当てている女子生徒。

「あの、遅れて、すいま、せん」

『『えっ?』』

一部を除いた教室全体から驚いたような声上がる。

まあ、普通は驚くわな。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい!あ、あの、姫路瑞希といます。よろしくお願ひしま
す……」

隣を見ると、明久が心配そうな目で姫路を見ていた。

……本当にわかりやすいやつだなこいつは。

「はいっ!質問です!」

「あ、は、はい。なんですか?」

いきなり質問を向けられ驚く姫路のその挙動は、まるで小動物のよう
で可愛いらしい。

あー、すごくかわいい

「なんでここにいますか？」

姫路瑞希。

入学した最初のテストで学年2位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残す生徒。

そんなFクラスとは無縁のはずの高成績を持つ可憐な容姿をした女の子。

そんな彼女がFクラスのクラスメイトとして目の前にいる。

さてさて、戦力強化は願ってもないぞ

第3戦「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまっています……」

SIDE 明久

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

聞きようによっては失礼な質問を姫路さんに浴びせる誰か。

でも、この質問はクラスにいるほとんど全員の疑問のはずだ。

成績優秀な彼女が最下層に位置するFクラスにいるわけがない。

学年中の誰もが、彼女はAクラスにいらっしゃると思っ

た
その言葉を聴き、クラスメイトたちは『ああ、なるほど』とうなず
いた

試験途中での退席は無得点になる。

彼女は振り分け試験を最後まで受けることができず、Fクラスになつてしまつたわけだ。

そして、隣の翼も途中退席でFクラスになつている。

親友の一人ある、黒武翼。

170?弱で耳までを隠す長髪の黒い髪。

顔はかつこ良くよくモテるがすべてを好きな人がいるという事で断つている。

..... 贅沢なやつだ。

いつも腰に銃をさしていて、ほかにもあるけどそれはいつかいうだろう.....

秀吉と幼なじみで、銃をもっているのには何か昔あった事が関係しているらしい。

聞くと嫌な顔をするので聞かないけど。

そんな翼は、『この世界は戦場』がモットーらしい。でも、「俺に敵対および、俺が悪だと思つた奴は敵だ」といつていた。

なんだかんだいってやさしんだよね。

そんな翼が退出した理由だけど非常に翼らしい

姫路さんが退出してしばらくしてのこと……………

あの日、文月学園から2キロほどある、銀行に強盗が入りその放送が入ったがとくに関係なく試験は続けられるはずだったが。人質がとられたと言う事がわかったとたんに

「早退します」

「何を言っている早く試験を受けなさい」

「銀行で犯人が銃を持っているんでしょ？俺が止めてきます」

「何をいって……………」

「この銃は何のためにあると思ってんですか？」

翼が銃を先生に突きつけていた

「こんなことしてただですむとおもってるのか？」

「知りませんよ。だいたい、俺は『戦争』がしたいんですからFクラスで十分です。」

「ま、まて…！」

「んじゃ、さいなら。」

笑顔で出ていってしまった。その後、人質を救出してきたらしい、「サツが動くより俺がうごいた方が早い。」って言っていた。

ほんとはAクラス並みなのにもつたいないなあ。

まあ、それでこそ翼なただけだね。

話は戻って、姫路さんの言い分を聞いたクラスメイトたちは……

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？確かに難しかった」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「試験前日の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

うん。ぐだぐだだね。

「で、では、1年間よろしくお願いします！」

そう言うと、姫路さんは逃げるように僕の隣の空いてる卓袱台に座

った。

って、僕の隣!?

僕の隣が姫路さん!?(大事なことなので2回言いました)

隣の姫路さんを見て思う。

ああ、やっぱり姫路さんは可愛いな。

「き、緊張しました……」

安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路さんの姿は、こっぴグッとくるものがある。

癒しだ……

この荒んだFクラスの唯一の癒しだ……

きっと彼女と秀吉がいなかったらこのクラスのひとたちはみんなモヒカンになっている事だろう。

よし、話かけてみよう。

「姫路S・・・「姫路」

雄二が重ねてきた。後で殺す。

第4戦「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

姫路

明久が姫路に話かけようとしたとき、雄二が割り込んで姫路に声をかけた。

「は、はい。何でしょうか？えっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、姫路です。こちらこそよろしくお願いします」

雄二に、深々と頭を下げる姫路。

育ちが良いんだな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「え！？あ、よ、吉井君！？」

明久の顔を見て驚き慌てる姫路。

隣が明久だって気づいてなかったのか？

「姫路……明久がブサイクですまん」

女装が似合いそうな男子として女子の間で有名な、明久がそんな訳ないだろうに……

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、お肌にも張りがあるし、スカートとか似合いそうだし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！むしろ……」

必死でフォローする姫路

少しフォローしてやるか。

「確かに見てくれは悪くはないと言えると思うが？」

「ですよね！……えっと」

「黒武翼だ。よろしく。明久のことだが、俺の知人にも明久に興味を持つてる奴がいるしな。雄二も知ってるだろ？」

「ああ、あいつのことだろう(ニヤリ)」

「え？僕のことを？それって誰」

「そ、それって誰ですか！！」

明久の声を遮るほどの食い付きよう。

姫路はやはり明久が好きだな。

残念なことに明久が気付くれないが……

「確か久保……」

明久が期待を込めた希望に満ちた目で、姫路がもの凄く真剣な目で俺を見る。

だが、あとは雄二に任せるとする。

「……利光だったかな」

久保利光性別、男

「……………（シクシク）」

「声を殺してさめざめと泣くなよ明久。半分は冗談だから安心しろ」

「え？残りの半分は？」

「さつき雄二も言ってたが、体は大丈夫なのか姫路？」

「ちよつと答えてよ圭一！残りの半分は！？」

声がでけえよ明久！

「はいはい、そこ静かにして下さいね」

「あ、すいませ」

バキィバキィツ……………バラバラバラ……………

まるで教卓がゴミのようだ！

たたいただけで崩れ落ちる教卓とは……………

どこまでもひどい設備だな。

「……替えを用意してきますので、少し待っていて下さい」

「あ、あはは……」

姫路が苦笑いをしていた。

その顔を見た明久が何やら思案顔をしたかと思うと

「……雄二、翼、ちょっといい？」

声をかけてきた。

「二こじゃ話しくいから、廊下で」

やれやれ、大体予想できるが……

Aクラス相手に『試召戦争』をやってみない？」

俺の最も望むことを言ってくれたよ。

「……………何が目的だ」

いや雄二よ、警戒しなくてもいいだろうに。

気持ちはわからんでもないがな。

しょうがないな、明久を援護してやるか。俺も望んでるしな

「明久、姫路の為だろ」

「な!?!ど、どうしてそれを!?!」

動揺しすぎだ

「なるほどな、そういうことか」

「明久らしいだろ?」

俺の言葉に楽しげな笑みを浮かべる雄二。

「べ、別にそんな理由じゃ」

「はいはい。言い訳は必要ないからな」

「だから、本当に違っつてば！」

さっきお前は認めただろうが『どうしてそれを』と。

「で、クラス代表の雄二としてはどうするつもりだ？」

「ああ、明久に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたからな」

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな…」

…」

なかなか良い事を言うな。まさか、こいつも過去に何かあったのか？

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついた」

「なら、Fクラスに俺の正体バラしていいぞ」

「……いいのか？」

「その方が士気も上がるだろう？あと、参謀、戦闘は俺が指揮をとる。俺のモットーはしってるだろう？」

「なるほどな、それがお前がAクラスに挑む理由か。」

「まあな。」

「……」

「……」

「どうした？」

「「やっぱお前（翼）はお人好しだな（だよ）」」

はい！？まあ、いいか。

ケリつけなきゃならん奴もいることだしな……

先生も戻ってきたので、俺達も教室に戻る。

自己紹介は途中で区切られ、雄二の番となった。

雄二は席を立つとゆっくり教壇に向かう。

そして自信に満ちた表情で教壇に上がり、言葉を紡ぎだす。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも雄二でも、好きに呼んでくれ」

さてと、もう後には引けなくなるぞ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二はAクラスに勝つ秘策があるようだが、いきなりAクラスに勝負を挑むほどバカじゃないだろう。

俺な申し込むかもしれないな。敵は倒しがいがある方がいいからな。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

俺や姫路の補給テストもあるし、みんなに召喚獣の扱いも慣れさせないといけない。

それにAクラスが対戦を拒否するかもしれないしな。

「不満はないか？」

「『『『大ありじゃあつ！！』』』」

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

FクラスがAクラスに勝負を挑む……普通に考えたら無謀なことだ。

「みんなの意見はもつともだ。そこでだ、これは代表としての提案だが」

でも俺は考える。

「

『簡単だ』とな。

雄二が戦争の引き金を引く中、俺はそんなことを考えていた。

第4戦「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

(後書

なかなか試召戦争に入れない。

第5戦「俺の名は武装神（アーマーマスター）だ！」（前書き）

問 以下の英文を訳しなさい。

This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「
*
x
」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

黒武翼の答え

「
あれは

教師のコメント

これです。

第5戦「俺の名は武装神（アーマーマスター）だ！」

Aクラスへの宣戦布告をした雄二だったが……

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんと秀吉がいたら何もいらぬい」

Fクラスの反応は、まあ予想通りの反応だな。

最後の奴は想定外だが……

Aクラスの点数はFクラスの点数と比べると桁が違う。

確かに普通に考えたら勝てる見込みはなどあるわけが無い。

「そんなことはない。いや、俺が勝たせてみせる！」

「何をバカなことを」

「できるわけないだろ」

「何の根拠があつてそんなことを」

「姫路さん愛しています」

そう、普通ならな。

「根拠？根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

何も正面きつて戦うだけが戦争ではないってことだ。

ひとまずお手並み拝見といきましょう。

「それを今から説明してやる」

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわ！？」

慌ててスカート裾を押さえる姫路。

やっぱりかと思ったがやはりまたやってたのかあいつは!?

俺があきれてるあいだに康太は壇上にいた。

顔についた畳の跡を手で隠したままで……

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性識者【ムッツリーニ】だ」

「……!!!(ブンブン)」

土屋康太という名前は有名じゃない。

でもムッツリーニの名前は違う。

男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。

盗撮、盗聴も戦場では大切だからな。

注：盗撮は立派な犯罪です！

「ムツツリーニだと!?!」

「あの『ムツツリ商会』を経営しているというムツツリーニか!?!」

「奴がそうだというのか?」

「だが見る。あそこまで明らかかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ」

「ムツツリの名に恥じない姿だ」

例えどういった状況であっても、自分の下心は隠し続けるその姿……

ムツツリーニの名は伊達じゃない!

「姫路のことは説明する必要もないだろう。全員その力はよく知っているはずだ」

「え、わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

学年次席の成績だからな。

余程のことがない限り、彼女に勝てる生徒はそうそういない。

「そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女さえいれば何もいらぬい」

いいかげんウザくなつてきたな……

最後のやつ、誰が言つてるんだ？……

「木下秀吉だつている」

「おお……」

「確か姉の木下優子はAクラスだつたよな」

「その弟なら……」

確かに秀吉の声帯模写は役に立ちそうだが、せいせきはよくないぞ。

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「Aクラスレベルの実力者が2人もいるってことだよな！」

雄二の言葉で確実にクラスの士気は上がっている。

そして

「それに、吉井明久だっている」

………シーン

ムードが台無しとなった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を出すのさ！そんな必要ないよね」

あるよ。

「誰だよ吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ああもつ！折角上がったた士気に翳りが見えてる！僕は雄二達と違って普通なんだから、わざわざって、なんで睨むのさ？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

明久の存在は、もともと士気が下がる原因になりかねない。

となると、明久の存在をいつ明かすのか？

まず、何も明かさずに試召戦争を行うのは無理だ。

戦いとは、試召戦争に限らず何が起きるかわからない。

不安・不確定要素はなるべく取り除いておくべきだ。

よって、ある意味自分のクラスの戦力を皆に伝えている今が1番望ましい。

だが士気は大丈夫だろう。

なぜなら、俺の紹介がまだ残っているからだ。

こう言っちゃなんだが、ムツツリーニと同じで、俺の『あの』名前
はかなり有名だ。

間違いなく士気を上げる事ができる。

後は俺に演説すれば、最高の状態で試召戦争に挑める状況に持って
いく自信もある。

さすが頭の回転だけは早いな雄二。

「そうか……知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは【観察処分者】だ」

「それって、バカの代名詞じゃなかったかっけ？」

「ち、違つよ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するなよバカ雄二！」

雄二と漫才をくりひろげる明久。

あの……」

「ん？どうした姫路？」

「観察処分者ってどういうものなんですか？」

「知らないのか？具体的に言うと教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなす生徒といった具合だな」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「ただな、召喚獣は教師の監視下でなければ喚び出せないし、物に触れるようになった召喚獣の負担が何割か明久自身にフィードバックされるんだ」

「それじゃあ……」

「さすが姫路、察しがいいな。フィードバックされるということは、召喚獣の疲労や痛みは明久自身に返ってくる。教師の許可が必要なせいで自分の為にも使えないから、正に罰だな」

観察処分者だからこそその利点もあるけど、あえて黙っておく。

「おいおい、観察処分者ってことは、召喚獣がやられると本人も苦しむってことだろ？」

「それならおいそれと召喚できない奴が1人いるってことになるよな」

「ただでさえ戦力が少ないのに……」

「役に立たないじゃんか」

それはどうか？

なめてると痛い目にあうぞ諸君。

某赤い彗星もいつてたる？

「MSの性能の差が圧倒的な戦力の差ではないことをおしえてやる
！」

つまり点数が低いからといってやくに立たない訳ではない。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「さっさと自分の席へ戻れバカたれ。邪魔だ」

「ひびっ!？」

「すまん、バカのせいで無駄な時間をとらせた。次で最後だ」

いよいよ俺の番だな。

折角だからカッコよく頼むぞ。

最後に紹介する人物……こいつが俺の、いや俺達の最終兵器だ。出
てこい翼」

了解だ。

「え？黒武君？」

「誰だあいつ？知ってるか？」

「また吉井みたいな奴か？」

「いや、代表が最終兵器って言ってるぐらいだ。すごいんじゃないか」

クラスからおどろきの声上がるが……

「こいつの名前は黒武翼」

「さて、ここからは自分で言う」

「わかった」

「自己紹介がまだだったからついでに言っておこう。俺の名前は黒武翼、この名字は好きじゃないから、呼ぶときは翼でいい。趣味はアニメ、特技は料理だ。

そして……俺の通り名は武装神だ！^{アーマーマスター}！」

『『『なにいいい!!』』』』

みんなから驚きの声上がる。

「都市伝説じゃなかったのか!？」

「実在していたのか？」

「そつだ、お前らの知る『あの』武装神だ。強盗を倒すために振り分け試験を放棄した男だ」

「当時の3年生を潰したり、鉄人と互角の戦いをしただけでなく、不良に悩んでいた生徒の手助けをしたり、ここらいつたいの悪人を全滅させたのも……その他お前らが知ってることは全部事実だ!」
いろいろやったなー

「おいおい、ここはすごいクラスなんじゃないか？」

「武装神もAクラスに匹敵する成績って話だったよな」

「相手がAクラスでも勝てるんじゃないか」

とりあえず、簡単にこれからどうするかの大まかな流れを雄二に聞いてから話し始めるとするか。

もう、俺の戦争は始まっている。

さあ、楽しい楽しい戦いの時間の幕開けだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629s/>

バカと武器と戦争

2011年10月9日01時41分発行